

浦島太郎

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、丹後たんごの国水みづの江えの浦うらに、浦島太郎というりょうしがありました。

浦島太郎は、毎日つりざおをかついでは海へ出かけて、たいや、かつおなどのおさかなをつつて、おとうさんおかあさんをやしなっていました。

ある日、浦島はいつものとおり海へ出て、一日おさかなをつつて、帰ってきました。途と中ちゆう、子どもが五、六人往來おうらいにあつまつて、がやがやしていました。何かなにとおもつて浦島がのぞいてみると、小さいかめの子を一ぴきつかまえて、棒ぼうでつついたり、石でたたいたり、さんざんにいじめているのです。浦島は見かねて、

「まあ、そんなかわいそうなことをするものではない。いい子だから」と、とめました。子どもたちはきき入れようもしないで、

「なんだい。なんだい、かまうもんかい」

といいながら、またかめの子を、あおむけにひっくりかえして、足でけったり、砂すなのなかにうずめたりしました。浦島はますますかわいそうにおもつて、

「じゃあ、おじさんがおあしをあげるから、そのかめの子を売っておくれ」といいますと、こどもたちは、

「うんうん、おあしをくれるならやつてもいい」

と行って、手を出しました。そこで浦島はおあしをやってかめの子をもらいうけました。子どもたちは、

「おじさん、ありがとう。また買っておくれよ」と、わいわいいいながら、行ってしまいました。

そのあとで浦島は、こうらからそつと出したかめの首くびをやさしくなでてやって、

「やれやれ、あぶないところだった。さあもうお帰りお帰り」

と行って、わざわざ、かめを海ばたまで持って行ってはなしてやりました。かめはさもうれしそうに、首や手足をうごかして、やがて、ぶくぶくあわをたてながら、水のなかにふかくしずんで行ってしまいました。

それから二、三日たつて、浦島はまた舟にのつて海へつりに出かけました。遠い沖おきのほうまでもこぎ出して、一いっしょう生しょうけんめいおさかなをつつていますと、ふとうしろのほうで

「浦島さん、浦島さん」

とよぶ声がしました。おやおもつてふりかえつてみますと、だれも人のかげは見えません。その代り、いつのまにか、一ぴきのかめが、舟のそばにきていました。

浦島がふしぎそうな顔をしていると、

「わたくしは、先日助けていただいたかめでございます。きようはちよつとそのお礼にま
いりました」

かめがこういだったので、浦島はびつくりしました。

「まあ、そうかい。わざわざ礼なんぞいいにくるにはおよばないのに」

「でも、ほんとうにありがとうございました。ときに、浦島さん、あなたはりゆう宮を
らんになったことがありますか」

「いや、話にはきいているが、まだ見たことはないよ」

「ではほんのお礼のしるしに、わたくしがりゆう宮を見せて上げたいとおもいますがいか
がでしょう」

「へえ、それはおもしろいね。ぜひ行ってみたいが、それはなんでも海の底にあるとい
うことではないか。どうして行くつもりだね。わたしにはとてもそこまでおよいでは行けな
いよ」

「なに、わけはございませぬ。わたくしの背中せなかにおのりください」

かめはこういって、背中を出しました。浦島は半分きみわるくおもいながら、いわれるままに、かめの背中にのりました。

かめはすぐに白い波なみを切って、ずんずんおよいで行きました。ざあざあいう波の音がだんだん遠とほくなって、青い青い水の底へ、ただもう夢ゆめのようにはこぼれて行きますと、ふとそこらがかつとあかるくなつて、白玉しらたまのようにきれいな砂すなの道みちがつづいて、むこうにりっぱな門が見えました。その奥おくにきらきら光つて、目のくらむような金銀のいらかが、たかくそびえていました。

「さあ、りゆう宮ぐうへまいりました」

かめはこういって、浦島を背中せなかからおろして、

「しばらくお待ちください」

といったまま、門のなかへはいつて行きました。

まもなく、かめはまた出てきて、

「さあ、こちらへ」

と、浦島を御殿ごてんのなかへ案内あんないしました。たいや、ひらめやかれいや、いろいろのおさかなが、ものめずらしそうな目で見ているなかをとおつて、はいつて行きますと、乙姫おとひめさまがおおぜいの腰元こしもとをつれて、お迎えむかに出てきました。やがて乙姫おとひめさまについて、浦島はずんずん奥おくへとおつて行きました。めのうの天井てんじょうにさんごの柱はしら、廊下ろうかにはるりがしきつめてありました。こわごわその上をあるいて行きますと、どこからともなくいいにおいがして、たのしい楽がくの音ねがきこえてきました。

やがて、水晶すいししょうの壁かべに、いろいろの宝ほう石せきをちりばめた大広間おおひろまにとおりますと、

「浦島さん、ようこそおいでくださいました。先日はかめのいのちをお助けたすくださいまして、まことにありがとうございます。なんにもおもてなしはございませんが、どうぞゆつくりおあそびくださいまし」

と、乙姫さまはいって、ていねいにおじぎしました。やがて、たいをかしらに、かつおだの、ふぐだの、えびだの、たこだの、大小いろいろのおさかなが、めずらしいごちそうを

山とはこんできて、にぎやかなお酒盛さかもりがはじまりました。きれいな腰元こしもとたちは、歌をうたったり踊りおどをおどったりしました。浦島はただもう夢ゆめのなかで夢を見ているようでした。

ごちそうがすむと、浦島はまた乙姫さまの案内あんないで、御殿ごてんのなかをのこらず見せてもらいました。どのおへやも、どのおへやも、めずらしい宝石でかざり立ててありますからそのうつくしきは、とても口やことばではいえないくらいでした。ひととおりに見してしまうと、乙姫おとひめさまは、

「こんどは四季のけしきをお目にかかけましょう」

といつて、まず、東の戸をおあけになりました。そこは春のけしきで、いちめん、ぼうつとかすんだなかに、さくらの花が、うつくしい絵のように咲き乱みだれていました。青青あおあおとしたやなぎの枝えだが風になびいて、そのなかで小鳥がないたり、ちようちようが舞まったりしていました。

次に、南の戸をおあけになりました。そこは夏のけしきで、垣根かきねには白いうの花が咲いて、お庭の木の青葉あおばのなかでは、せみやひぐらしがいないいました。お池には赤と白のはすの花が咲いて、その葉の上には、水晶すいしょうの珠たまのように露つゆがたまっていました。お池の

ふちには、きれいなさぎ波なみが立って、おしどりやかもがうかんでいました。

次に西の戸をおあけになりました。そこは秋のけしきで花壇かたんのなかには、黄ぎく、白ぎしらぎくが咲き乱れて、ぷんといいかおりを立てました。むこうを見ると、かつともえ立つようなもみじの林の奥おくに、白い霧きりがたちこめていて、しかのなく声がかなくきこえました。

いちばんおしまいに、北の戸をおあけになりました。そこは冬のけしきで、野には散りちのこつた枯葉かれはの上に、霜しもがきらきら光っていました。山から谷にかけて、雪がまつ白に降り埋うずんだなかから、柴しばをたくけむりがほそぼそとあがっていました。

浦島は何を見ても、おどろきあきれて、目ばかり見はっていました。そのうちだんだんぼうつとしてきて、お酒に酔よった人のようになって、何もかもわすれてしまいました。

三

毎日おもしろい、めずらしいことが、それからそれとつづいて、あまりりゆう宮がたのしいので、なんとということもおもわずに、うかうかあそんでくらすうち、三年の月日がた

ちました。

三年めの春になったとき、浦島はときどき、ひさしくわすれていたふるさとの夢を見るようになりました。春の日のほかほかあたたっている水の江の浜べで、りようしたちがげんきよく舟うたをうたいながら、網をひいたり舟をこいだりしているところを、まざまざと夢に見るようになりました。浦島はいまさらのように、

「おとうさんや、おかあさんは、いまごろどうしておいでになるだろう」

と、こうおもい出すと、もう、いても立つてもいられなくなるような気がしました。なんでも早くうちへ帰りたいとばかりおもうようになりました。ですから、もうこのごろでは、歌をきいても、踊りを見ても、おもしろくない顔をして、ふさぎこんでばかりいました。

その様子を見ると、乙姫さまは心配して、

「浦島さん、ご気分でもおわるいのですか」

とおききになりました。浦島はもじもじしながら、

「いいえ、そうではありません。じつはうちへ帰りたくなつたものですから」

といいますと、乙姫さまはきゆうに、たいそうがっかりした様子をなさいました。

「まあ、それはざんねんでございますこと。でもあなたのお顔をはいけんいたしますと、

この上おひきとめ申しても、むだのようにおもわれます。ではいたし方かたございません、行っていらつしやいまし」

こうかなしそうにいつて、乙姫さまは、奥おくからきれいな宝ほう石せきでかざった箱はこを持っておいでになつて、

「これは玉手箱たまてばこといつて、なかには、人間のいちばんだいじなたからがこめてございます。これをおわかれのしるしにさし上げますから、お持ちかえりくださいまし。ですが、あなたがもういちどりゆう宮きゆうへ帰つてきたいとおぼしめすなら、どんなことがあつても、けつしてこの箱をあけてごらんになつてはいけません」

と、くれぐれもねんをおして、玉手箱たまてばこをおわたしになりました。浦島は、

「ええ、ええ、けつしてあげません」

といつて、玉手箱をこわきにかかえたまま、りゆう宮きゆうの門を出ますと、乙姫おとひめさまは、またおおぜいの腰こしもと元もとをつれて、門のそとまでお見送りになりました。

もうそこには、れいのかめがきて待つていました。

浦島はうれしいのとかなしいのとで、胸むねがいつぱいになつていました。そしてかめの背せ中になかのりますと、かめはすぐ波なみを切つて上がつて行って、まもなくもとの浜べにつきまし

た。

「では浦島さん、ごきげんよろしゅう」

と、かめはいって、また水のなかにもぐって行きました。浦島はしばらく、かめの行くえを見送っていました。

四

浦島は海ばたに立ったまま、しばらくそこらを見まわしました。春の日がほかほかあたって、いちめんにかすんだ海の上に、どこからともなく、にぎやかな舟うたがきこえました。それは夢ゆめのなかで見たふるさとの浜まぎの景色けしきとちつともちがったところはありませんでした。けれどよく見ると、そこらの様子ようすがなんとなくかわっていて、あう人もあう人も、いっこうに見知らない顔ばかりで、むこうでもみような顔をして、じろじろ見ながら、こともかけずにすまして行ってしまいます。

「おかしいこともあるものだ。たった三年のあいだに、みんなどこかへ行ってしまうはず

はない。まあ、なんでも早くうちへ行ってみよう」

こうひとりごとをいいながら、浦島はじぶんの家の方角ほうかくへあるき出しました。ところが、そことおもうあたりには草やあしがぼうぼうとしげって、家なぞはかげもかたちもありません。むかし家の立っていたらしいあとさえものこってはいませんでした。いったい、おとうさんやおかあさんはどうなったのでしょうか。浦島は、

「ふしぎだ。ふしぎだ」

とくり返しながら、きつねにつままれたような、きよとんとした顔をしていました。

するとそこへ、よぼよぼのおばあさんがひとり、つえにすがってやってきました。浦島はさつそく、

「もしもし、おばあさん、浦島太郎のうちはどこでしょう」

と、声をかけますと、おばあさんはげんそうに、しよぼしよぼした目で、浦島の顔をながめながら、

「へえ、浦島太郎。そんな人はきいたことがありませんよ」

といいました。浦島はやつきとなつて、

「そんなはずはありません。たしかにこのへんに住んでいたのです」

といました。

そういわれて、おばあさんは、

「はてね」と、首をかしげながら、ついでせいびにしてしばらくかんがえこんでいましたが、やがてぽんとひざをたたいて、

「ああ、そうそう、浦島太郎さんというと、あれはもう三百年も前の人ですよ。なんでも、わたしが子どものじぶんきいた話に、むかし、むかし、この水の江の浜に、浦島太郎という人があつて、ある日、舟にのつてつりに出たまま、帰つてこなくなりました。たぶんりゆう宮へでも行つたのだろうということですよ。なにしろ大昔の話だからね」

こういって、また腰をかがめて、よぼよぼあるいて行つてしまいました。

浦島はびつくりしてしまいました。

「はて、三百年、おかしなこともあるものだ。たった三年りゆう宮にいたつもりなのに、それが三百年とは。するとりゆう宮の三年は、人間の三百年にあたるのかしらん。それでは家もなくなるはずだし、おとうさんやおかあさんがいらつしやらないのもふしぎはない」
こうおもうと、浦島はきゆうにかなしくなつて、さびしくなつて、目の前がぐらくくなりました。いまさらりゆう宮がこいしくてたまらなくなりました。

しおしおとまた浜べへ出てみましたが、海の水はまんまんとたたえていて、どこがはてともしれません。もうかめも出てきませんから、どうしてりゆう宮へわたろう手だてもありませんでした。

そのとき、浦島はふと、かかえていた玉手箱たまてばこに気がつききました。

「そうだ。この箱はこをあけてみたらば、わかるかもしれない」

こうおもうとうれしくなつて、浦島は、うっかり乙姫おとひめさまにいわれたことはわすれて、箱のふたをとりました。するとむらさき色の雲が、なかからむくむく立ちのぼつて、それが顔にかかったかとおもうと、すうつと消えて行つて箱のなかにはなんにもこつていませんでした。その代りかわ、いつのまにか顔じゆうしわになつて、手も足もちぢかまつて、きれいなみぎわの水にうつつた影かげを見ると、髪かみもひげも、まっしろな、かわいいおじいさんになつていました。

浦島はからになつた箱はこのなかをのぞいて、

「なるほど、乙姫おとひめさまが、人間のいちばんだいじなたからを入れておくとおっしゃつたあれは、人間の寿じゆみょう命めいだつたのだな」

と、ざんねんそうにつぶやきました。

春の海はどこまでも遠くかすんでいました。どこからかい声で舟うたをうたうのが、またきこえてきました。

浦島は、ぼんやりとむかしのことをおもい出していました。

青空文庫情報

底本：「むかしむかしあるところに」童話屋

1996（平成8）年6月24日初版発行

1996（平成8）年7月10日第2刷発行

底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋社

1948（昭和23）～1949（昭和24）年発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2001年12月19日公開

2008年10月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

浦島太郎

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>